

日本アーカイブズ学会 2013 年大会
企画研究会「放射線データアーカイブズの構築に向けて」
趣旨説明

2011年3月11日の東日本大震災による福島原発事故は、極めて大きな放射線被害を引き起こし、いまなお多くの人々の生活と生命に深刻な影響を及ぼし続けています。

福島原発事故の影響を調査するため、事故発生直後から、国や地方自治体から個人に至るまで、多くの機関や研究者らが放射線の測定を行ってきました。そのこと自体、これまでにあまり例を見ない社会現象であるともいえ、歴史事実として記録していく必要がありますが、重要なのは測定データです。それらの測定データは実に多様であり、データの性質や信ぴょう性については、今後科学的な検証が必要でしょう。しかし、適切に保存・管理していけば、放射線被害を受けた方々の健康回復や被害の拡大防止に役立つデータも多くあるはずです。また、今回の事故の大きさを考えると、過去の広島・長崎原爆やチェルノブイリ原発事故による放射線被害データがそうであるように、私たちは福島原発事故の放射線測定データを人類共有の遺産として後世に残し、安全で平和な未来を構築するためのかけがえのない資源として、活かしていかなければならないと考えます。

しかし、福島原発事故の放射線測定データは、極めて多くの機関や個人のもとに散在しており、散逸、消失しつつあるデータも少なくないと考えられることから、その保全のためには、緊急かつ組織的な取り組みが必要です。本来ならば、この取り組みは、国が中心となり、公共の事業として一元的な「放射線測定デ

「アーカイブズ」を構築すべきだと考えますが、その第一歩として、私たち日本アーカイブズ学会は、昨年、日本物理学会ならびに国会図書館の協力で設けられた合同ワーキンググループに参加し、「放射線測定データアーカイブズ」の実現に向けた取り組みを始めました。

この合同ワーキンググループが生まれ、日本アーカイブズ学会が参加することになったきっかけは、昨年の日本アーカイブズ学会企画研究会で、政池明氏が「原発事故による放射線測定結果のアーカイビング」という報告をされたことにあります。政池氏らの呼びかけで、まず日本物理学会の中にこの問題を検討するワーキンググループが設置され、それに日本アーカイブズ学会と、かねて東日本大震災に関するアーカイブズ活動に積極的に取り組んできた国立国会図書館が協力するかたちで、昨年暮れに合同ワーキンググループが生まれました。したがって、本日の企画研究会は、この合同ワーキンググループの中間報告、というよりも、むしろ旗揚げの研究会という性格を持っています。

報告は、日本物理学会、日本アーカイブズ学会、国立国会図書館の3団体から、3人の方をお願いをしました。

まず名古屋大学太陽地球環境研究所の伊藤好孝さんから「福島放射線測定データの現状とメタデータベース作り」というタイトルで総論的なお話をさせていただきます。次に、学習院大学大学院アーカイブズ学専攻博士後期課程の松尾美里さんに、「アーカイブズ学から考える科学資料のアーカイビング」という報告をさせていただきます。そして最後は、国立国会図書館電子情報部の松本保さんによる「国立国会図書館における東日本大震災アーカイブ構築の取組み」というご報告です。司会は、日本アーカイブズ学会副会長の石原一則にお願いします。みなさんの

積極的なご参加により、意義ある企画研究会になるよう、心から期待しています。簡単ですが、以上で趣旨説明を終わります。